言文一致 小学日本文典

林 甕臣

特

078397-000-7

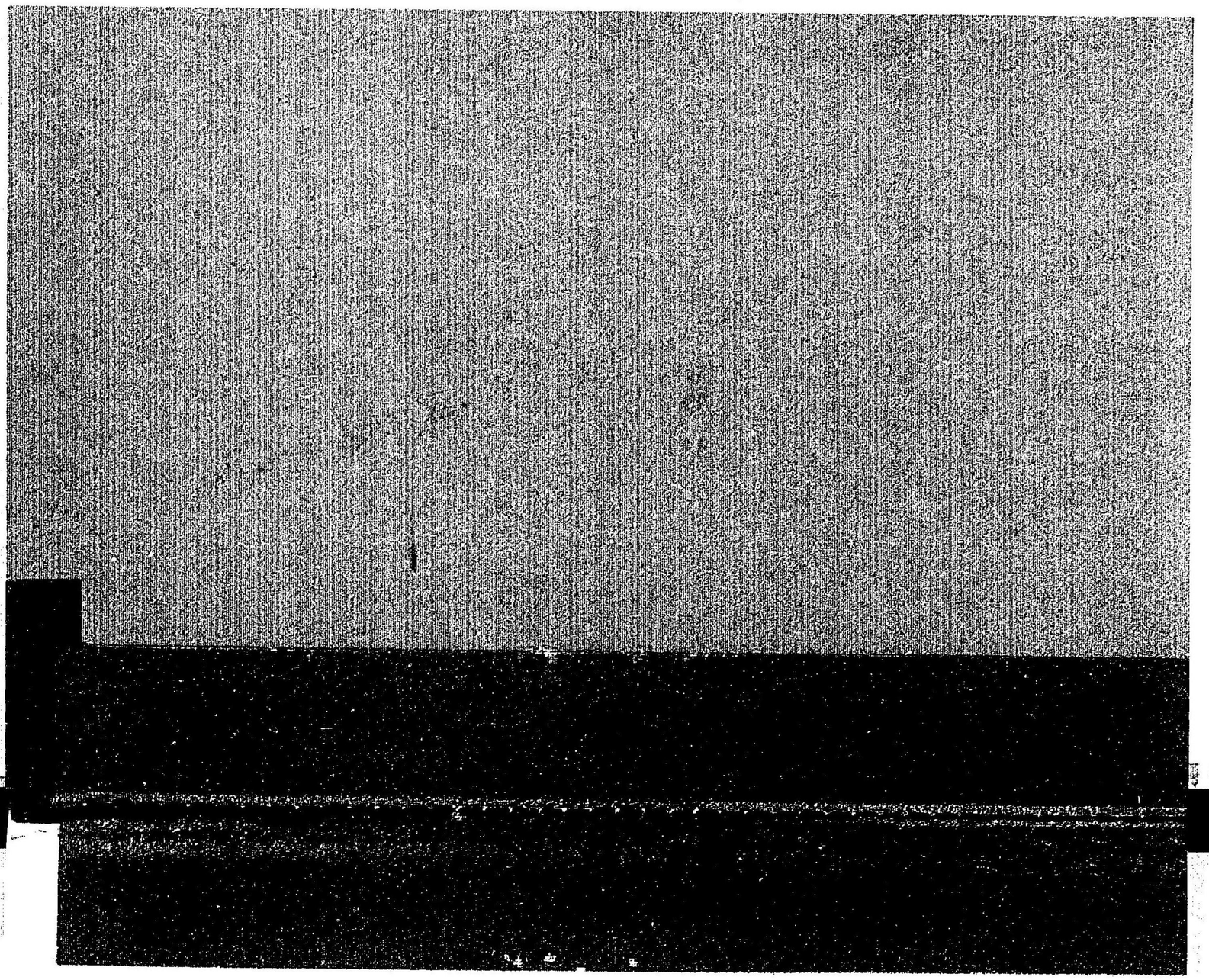
特53-455

小学日本文典（訓文一致）

林 甕臣／著

M34. 8

DAC-2064



R-91
410
146
589

言文一致會發起者本部　主幹　林甕臣　著

言文一致　小學日本文典

附錄語法文則批判

言文一致會本部編纂部

君民同祖書院

言文一致會發起者本部　主幹　林　甕臣　著

言文一致

小學日本文典

附錄語法文則批判

言文一致會本部編纂部

君民同祖書院

言文一致 小學日本文典

目次

第一課　言文歌
第二課　名詞　動詞　辭
第三課　綴句法
第四課　立案　基詞
第五課　主格名詞の定義
第六課　副格名詞の定義
第七課　目的名詞の定義
第八課　所在名詞の定義
第九課　因由名詞の定義

第十課　接句動詞の定義
第十一課　結句動義の定義
第十二課　立案基詞の類別研究法
第十三課　立案法
第十四課　納涼に誘ふ手紙の文
第十五課　同返事
第十六課　花見の記事文
第十七課　木の論說文

言文一致　小學日本文典

緒言

こゝ　明治三十三年二月　おのれ　言文一致會おこし　つぎの月の三月六日　帝國教育會の講室で　開會式おこなひ　世に　となへあるいだ　結果にもや　おひ〳〵　言文一致体の　筆ふるふ人　おほく　なり　現時　俗語式の文典や　語典が　西に東に　さそひ出づ　國家のため　教育の　うへに　功が　みえた　かと　手うちて　よろこんだ　しかし　おのれ　この會の責任者たるの　止むあたはず　一々　とって　撿視したところ　ほとんど　頗るまれ腹かゝへも　せられ　淺劣も　また　あまりに　稚さ　すぎるのには　たまげた　を

さなさ　すぎるのも　よいが　ほかの書物とも　ちがふ　いやしく
も　文典や　語典は　こんな埒もない　むやみな事されては　手うち
て　にこ〳〵　するどころか　とんでも　ない話だ　世の人を
馬鹿にし　あき旨にした　仕方だ　この言文一致會では　うちすて
丶も　おけぬ　そは　もしも　學校國語の科に　この法外な　影響
が　およんだが　最期　わが教育上の根基を　みだし　わが日本國
の風紀にも　かゝる次第で　あるから
そも〳〵　この會が　國家に任じ　二十世紀の機に　さきだち　こぞ
から　わが國語國文の一新革正を　期して　天下に　豫言した　とほ
り　いよ〳〵　實地に　ついて　約束を果さねば　會員賛成者も　四
方から　せまりて　ゆるさず　時機も　また　促がして　責めが　身

一つに　あつまることに　立ち　いたつた
そこで　わが日本の新式文法の　てほんを　示すに　諺にも「高き
に登るに卑きよりす」と　また　望まれも　するに　もだしがたく
まづ　小學生に　作文をしへる式法から　はじむ　幼齢へ　の訓
育は　先入　師と　なるの　恐れも　あるゆゑ　じつは　かの異說學
家の　ふせぎの　ためにも　とて
この書　文典が　すなはち　これで　ある　舊式　新式の語法文則
に　かゝるものを　あつめて　かたはしから　視査するに　文典と語
典と　の區別を　きつぱりと　その學理原則の　立ったものが　まだ
今日の所では　斷じて　一つも　ない　これ　この會が　任じて
本式の新式文典　新式語典を　あみて　以て　會員　また　社會公

衆に頒かたねば　ならぬ所由　また　責務が　こゝに　ある
ことに　また　言文一致會の　この文典の斬新特色は
立案基詞の一新原則を　啓發し　名詞を
主格名詞　副格名詞　目的名詞
所在名詞　因由名詞
の　五つに　定め　動詞を
接句動詞　結句動詞
の　二つに　定めたので　ある　日本文法は　この原則に　據にゐ
らねば　とうてい　作文に　實地應用は　だめで　ある　これ　本
篇版權の効力は　たゞ　この要点に　あるのみ
明治三十四年八月　言文一致會本部　主幹　林　甕臣　いふ

凡例

一　詞の類別

名詞に
實名詞
代名詞
合名詞

動詞に
作動詞
形動詞
合動詞

辭　に

靈　辭
機　辭

の　小わけ　あれど　略す　幼齡の　小學生には　簡易を　主とする
から

一　篇中　語格文法の　類別

類別は　大別のみに　とゞめ　小別に　わたるものは　すべて
略す　たゞ　作文教授に　關くことの　できぬ　要目　のみ
をあぐ

一　篇中　結句法の　格例

格例は　たとへば「教へる」「受ける」と　結ぶべきを「教ふ」
「受く」と　結んだ例が　ある　これは　おのれが　啓發の　一

新說　本編　下の卷に　いふ

一　附錄　語法文則批判

これは　別冊として　下の卷に　つゞけて　だす

特53
455

言文一致 小學日本文典

林甕臣著

第一課

言文歌

われ人が　わが意を　ほかの人に　あらはし示すのに　三つの仕方が
ある
口で　言ふのが　言
筆で　書くのが　文
曲で　謠ふのが　歌

しかし 斯く 三つに 成るが つまり 一つ物と 言うて よい

第二課

名詞 動詞 辭

名詞と 動詞と 辭(てには)との 別かちは つまり 詞の役目を さす名目で ある

名詞は 物の名を あらはす役目

動詞は 物の動(はたら)きを あらはす役目

辭 は 詞と詞とを つなぐ役目

なほ 名詞は 語尾の 變化しないのを 以て 定義とし 動詞は 語尾の 變化するのを 以て 定義とし 辭は 名詞と 動詞の 語尾に 添はって 活きを あらはすを 以て 定義とす

第三課

綴 句 法

綴句法は 言も 文も 歌も 共に みな 一つ法で ある その 仕方は

名詞と

動詞と

が

辭の

仲だちで 組みあはさって 成りたつものとす たとへば

馬が　走る
犬の　吠える
雀は　飛ぶ
鯉も　泳ぐ
烏ぞ　黒い
友と　遊ぶ
車夫よ　來い

と言ふやうに　句を　綴りて　書くが　ごとし

そこで　その　綴りを　解き剖けば

馬　犬　雀　鯉　烏　友　車夫

は　名詞

走る　吠える　飛ぶ　泳ぐ　黒い　遊ぶ　來い

は　動詞

がのはもぞとよ

は　辭

第四課

立案基詞

立案基詞は　案を　立てる基本と　なる詞を　いふ　大わけして

綴句名詞
綴句動詞

の　二つとす　その語尾に　それ〴〵　特性の辭が　添はって　お

の〳〵句を綴る役目の資格が定まる　小わけして

綴句名詞は

主格名詞
副格名詞
目的名詞
所在名詞
因由名詞

の五つとす

綴句動詞は

接句動詞
結句動詞

の二つとす

第五課

主格名詞の定義

主格名詞は　章句の中に　於て　文意の主宰と　成りて　他の名詞を支配し　その動作の用向きに　それ〴〵を　使ひなし　その句脈の結びを　つかさどる主權だちの名詞を　いふ　この語尾には　かならず

「が　の　は　も　ぞ　と　よ」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　名詞は　すべて　その語尾に　添はる辭に　よって　その役目の資格を判別せよ　たとへば

馬が　人に　鞭うたれて　路を　走る
犬の　怪しみて　夜中に　人を　吠える
雀の子は　翼は　短いが　巣より　飛ぶ
獣を　造りもせぬに　鯉も　水面に　泳ぐ
鳥ぞ　羽ばかりでなく　嘴から　尾のさきまで　黑い

の　五章句の中で

馬が　犬の　雀の子は　鯉も　鳥ぞ。

の　ごとき類が　「主格名詞」で　ある

第六課

副格名詞の定義

副格名詞は　章句の中に　於て　文意の趣きに　對して　主格名詞に　從屬し　その　副ひ役と　成る役目の名詞を　いふ　この語尾に　は　かならず

「が　の　は　も　ぞ　と　よ」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　たとへば

雀の子は　翼は　短いが　巣より　飛ぶ
友と　花見に　行き　公園に　遊ぶ
車夫よ　迎へに　來い

の　三章句の中で

翼は　友と　車夫よ

の　ごとき類が　「副格名詞」で　ある

第七課

目的名詞の定義

目的名詞は　章句の中に　於て　文意の趣きに　對して　主格名詞の動作の目的を　あらはす　役目の名詞を　いふ　この語尾には かならず

「を　をも　をば」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　たとへば

馬が　人に　鞭うたれて　路を　走る

犬の　怪しみて　夜中に　人を　吠える

麩を　遺りもせぬに　鯉も　水面に　泳ぐ

の　三章句の中で

路を　人を　麩を

の　ごとき類が「目的名詞」で　ある

第八課

所在名詞の定義

所在名詞は　章句の中に　於て　文意の趣きに　對して　主格名詞の動作の所在　また　期日を　あらはす役目の名詞を　いふ　この語尾には　かならず

「に　へ　より　から　まで　にて　で　と」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　たとへば

犬の　怪しみて　夜中に　人を　吠ゆる
雀の子は　翼は　短いが　巣より　飛ぶ
麩を　遣りもせぬに　鯉も　水面に　泳ぐ
烏ぞ　羽ばかりでなく　嘴から　尾のさきまで　黑い
友と　花見に　行き　公園に　遊ぶ

の　五章句の中で

夜中に　巣より　水面に　嘴から　尾のさきまで　公園に

の　ごとき類が　「所在名詞」で　ある

第九　課

因由名詞の定義

因由名詞は　章句の中に　於て　文意の趣きに　對して　主格名詞の動作の因由を　あらはす役目の名詞を　いふ　この語尾には　かならず

「に　へ　より　から　まで　にて　で　と」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　たとへば

馬が　人に　鞭うたれて　路を　走る
友と　花見に　行き　公園に　遊ぶ
車夫よ　迎へに　來い

の　三章句の中で

人に　花見に　迎へに

の　ごとき類が　「因由名詞」で　ある

第十課

接句動詞の定義

接句動詞は　章句の中に　於て　句脈を　つなぎ　主格名詞に　對照して　文意の機轉を　あらはす役目の動詞を　いふ　この語尾には　かならず

「て　に　を　で　ので　ば　ならば　なら　だが　であるが　ですが　ますが　ぬが　うが　ようが　であらうが　でせうが　ませうが　まいが　たが　であったが　でしたが　ましたが　なかったが」

の　ごとき辭が　添はるを　以て　定義とす　これを

接句動詞

といふ　たとへば

馬が　人に　鞭うたれて　路を　走る

犬の　怪しみて　夜中に　人を　吠える

雀の子は　翼は　短いが　巣より　飛ぶ

麩を　遣りもせぬに　鯉も　水面に　泳ぐ

烏ぞ　羽ばかりでなく　嘴から　尾のさきまで　黑い

友と　花見に　行き　公園に　遊ぶ

の　六章句の中で

鞭うたれて　怪しみて　短いが　遣りもせぬに　羽ばかりでな

く　行き

の　ごとき類が「接句動詞」で　ある

第十一課

結句動詞の定義

結句動詞は　章句の中に　於て　句脈を　結び　主格名詞に　呼應して　文意の段落を　あらはす役目の動詞を　いふ　この語尾には　かならず

「だ　である　です　ます　ぬ　う　よう　であらう　でせう　ませう　まい　た　であった　でした　ました　なかった」

のごとき辭の　添はるを　以て　定義とす　しかし　時として　辭の　添はらぬ場合も　あり　これを

結句動詞

といふ　たとへば

馬が　人に　鞭うたれて　路を　走る

犬の　怪しみて　夜中に　人を　吠える

雀の子は　翼は　短いが　巣より　飛ぶ

獣を　遣りもせぬに　鯉も　水面に　泳ぐ

鳥ぞ　羽ばかりでなく　嘴から　尾のさきまで　黑い

友と　花見に　行き　公園に　遊ぶ

車夫よ　迎へに　來い

の　七章句の中で

走る　吠える　飛ぶ　泳ぐ　黑い　遊ぶ　來い

の　ごとき類が　「結句動詞」で　ある

第十二課

立案基詞の類別研究法

立案基詞の　類別を　よく　その學理の定義に　ついて　その差異辨別を　豫め　よく　研究するを　緊要とす

この研究の仕方は　簡短な文や　歌に　ついて　その章句の文意を推して　解き剖いて　見るに　若くは　ない

まづ　前條に　その格例を　示した　七章句に　ついて　その仕方を指し示す

その仕方は　すなはち

馬が（主）人に（因）鞭うたれて（接）（氣が　立ち（接）野に（所）路を（目）走る（結）

犬の（主）（人が（副）來るのを（目）見て（接）賊かと（因）怪しみて（接）夜中に（所）人を（目）吠える（結）

雀の子は（主）翼は（副）短いが（接）（翼が（副）利くと（因）見えて（接）巣より（所）（空を（目））飛ぶ（結）

（人が）（副）獸を（目）遣りもせぬに（接）鯉も（主）（貰たさに）（因）水面に（所）泳ぐ（結）

鳥ぞ（主）（特性で（因）身体が）（副）羽ばかりでなく（接）嘴から（所）尾のささまで（主）黑い（結）

（吾は）（主）友と（副）花見に（因）行き（接）（花を（目）見て）（接）公園に（所）遊ぶ（結）

（命令者）（主）車夫よ（副）（車を（目）以て）（接）迎へに（因）（此所に）（所）來い（結）

右に　その格例の差異辨別を（目）指し示した通りで（接）文でも（因）歌でも（結）

作文　作歌の上に　於て　立案基詞が　表面に　あらはれるのは　つまり　文意の要點に　屬する基詞のみで　あへて　その必要に　せまらぬ基詞は　裏面に　かくれ　句間言外に　含まりて　省かる例である

その章句の間に　挿しはさみて　掲け示した括孤の中のは　その省かった基詞を　あらはして　指し示したのである

それゆゑに　作文に　筆を　立てるには　先づ　その文意の　由る所起こる所の要點を　意の中に　決定し　その一章の句中　第一に

主格名詞

の　何れなるか　を　先決問題として　きめるのが　肝要である

次に　その「主格名詞」を　表面に　あらはした　ものか　裏面に　かくした　ものか　を　注意し

次に　その「主格名詞」に　對して　たゞ　文意の要點に　屬する限りの基詞のみを　表面に　あらはし　成るたけ　あへて　必要に　せまらぬ基詞は　省いて　簡短に　立案するを　法とす

しかし　省いても　その基詞をば　句間に　含め存して　文義の　貫くべきやうに　立案式の法規を　失はぬを　要す　そは　斯く　省かりても　その基詞の氣脈が　ことごとく　連續して　組み立てに　具はらねば　立案の式が　整はぬからである

第十三課

立案法

立案法は　作文の結構　すなはち　文を　綴る骨組みを　成す仕方で
ある
その仕方は
主格名詞と
副格名詞と
目的名詞と
所在名詞と
因由名詞と
が　骨子と　成り
接句動詞と
結句動詞と

が　機關と　成って　作文の骨組みを　形づくるものとす　その仕方
は
先づ　心で　その案を　思ひつき
次に　筆を　立てるに　臨み　その文意の主要たる「主格名詞」は
何れの點に　存するか　を　その思ひついた　案に　對し
て　意の中に　思ひ定めるを　要す
次に　その文意の目的たる「目的名詞」は　何で　あるか　の要點
を　推して　探るを　要す
次に　その文意の所在たる「所在名詞」は　何れ　なるか　を　知
るを　要す
次に　その文意の中に「副格名詞」の　あるか　なきか　を　探り

次に　その文意の中に「因由名詞」のあるか　なきか　を知るを要す

（二四）

第十四課

納涼に誘ふ手紙の文

手紙を　遣る人　すなはち　「わたし」と　言ふ語が
　主格名詞
で　その手紙を　受ける友　すなはち　「あなた」と　言ふ語が
　副格名詞
で　その手紙で　友を　誘ふ因由たる　「涼みに」と　言ふ語が
　因由名詞
である　ゆゑに　その手紙の文面に　就いても　同じ法規で　す

なはち

わたしは　澤へ　螢を　捕りながら　涼みに　行きますが　あなたも　いらっしゃらぬか

と　言ふ文段の中で

わたしは　は　主格名詞
澤へ　は　所在名詞
螢を　は　目的名詞
捕りながら　は　接句動詞
涼みに　は　因由名詞
行きますが　は　接句動詞
あなたも　は　副格名詞

（二五）

いらっしゃらぬか　は　結句動詞

であるが　ごとし

第十五課

前文の　返事

それは　ありがたう　わたしも　行きたくあります　あなたと

ごいっしょに

と　言ふ文段の中で

それは　は　副格名詞

ありがたう　は　結句動詞

わたしも　は　主格名詞

行きたくあります　は　結句動詞

あなたと　は　副格名詞

ごいっしょに　は　因由名詞

であるが　ごとし

第十六課

花見の　記事文

花が　咲いた　うるはしい　櫻は　花の王と　言ふが　ちがひ

ない　散らないうちに　あすも　來て　見よう

と　言ふ文段の中で

花が　は　主格名詞

咲いた	は	結句動詞
うるはしい	は	結句動詞
櫻は	は	主格名詞
花の王と	は	副格名詞
言ふが	は	接句動詞
ちがひない	は	結句動詞
散らないうちに	は	所在名詞
あすも	は	所在名詞
來て	は	接句動詞
見よう	は	結句動詞

であるが ごとし

第十七課

木の論說文

櫻は 花の王と いふが 桃は 花ばかりでなく 實(み)も 喰(た)べて うまい 木は 花よりも 實を以て 品評せねば ちがふ

諺に「實のなる木は 花から知れる」と 言ふでは ないか

と 言ふ文段の中で

櫻は	は	主格名詞
花の王と	は	副格名詞
いふが	は	接句動詞
桃は	は	主格名詞

花ばかりでなく　は　接句動詞
實も　は　副格名詞
喰べて　は　接句動詞
うまい　は　結句動詞
木は　は　主格名詞
花よりも　は　所在名詞
實を　は　目的名詞
以て　は　接句動詞
品評せねば　は　接句動詞
ちがふ　は　結句動詞
諺に　は　所在名詞

實のなる木は　は　主格名詞
花から　は　所在名詞
知れると　は　接句動詞
言ふではないか　は　結句動詞

であるが　ごとし

そこで　立案基詞が　作文の骨組みを　形づくるうへに　於て　主格名詞　はしめ　他の　それ〴〵の基詞が　その役目に　任ずる勤め方の　受け持ちに　ついての　學理の定義は　すでに　上の　その條々に　說き示した　とほりで　おほむね　その理合ひが　のみこめた筈である

次の　課から　は　立案法の　練習に　順序の　規律を　たゞし　圖

花ばかりでなく　は　接句動詞
實も　は　副格名詞
喰べて　は　接句動詞
うまい　は　結句動詞
木は　は　主格名詞
花よりも　は　所在名詞
實を　は　目的名詞
以て　は　接句動詞
品評せねば　は　接句動詞
ちがふ　は　結句動詞
諺に　は　所在名詞

實のなる木は　は　主格名詞
花から　は　所在名詞
知れると　は　接句動詞
言ふではないか　は　結句動詞

であるが　ごとし

そこで　立案基詞が　作文の骨組みを　形づくるうへに　於て　主格名詞　はしめ　他の　それ〴〵の基詞が　その役目に　任ずる勤め方の　受け持ちに　ついての　學理の定義は　すでに　上の　その條々に　說き示した　とほりで　おほむね　その理合ひが　のみこめた筈である

次の　課から　は　立案法の　練習に　順序の　規律を　たゞし　圖

式を まうけて その 種類を 別かち その 類例を 示し 順次
作文組み立て法の 本題に 歩を 進めようとす

一言文致 小學日本文典 上終

明治三十四年八月十二日印刷
明治三十四年八月十五日發行

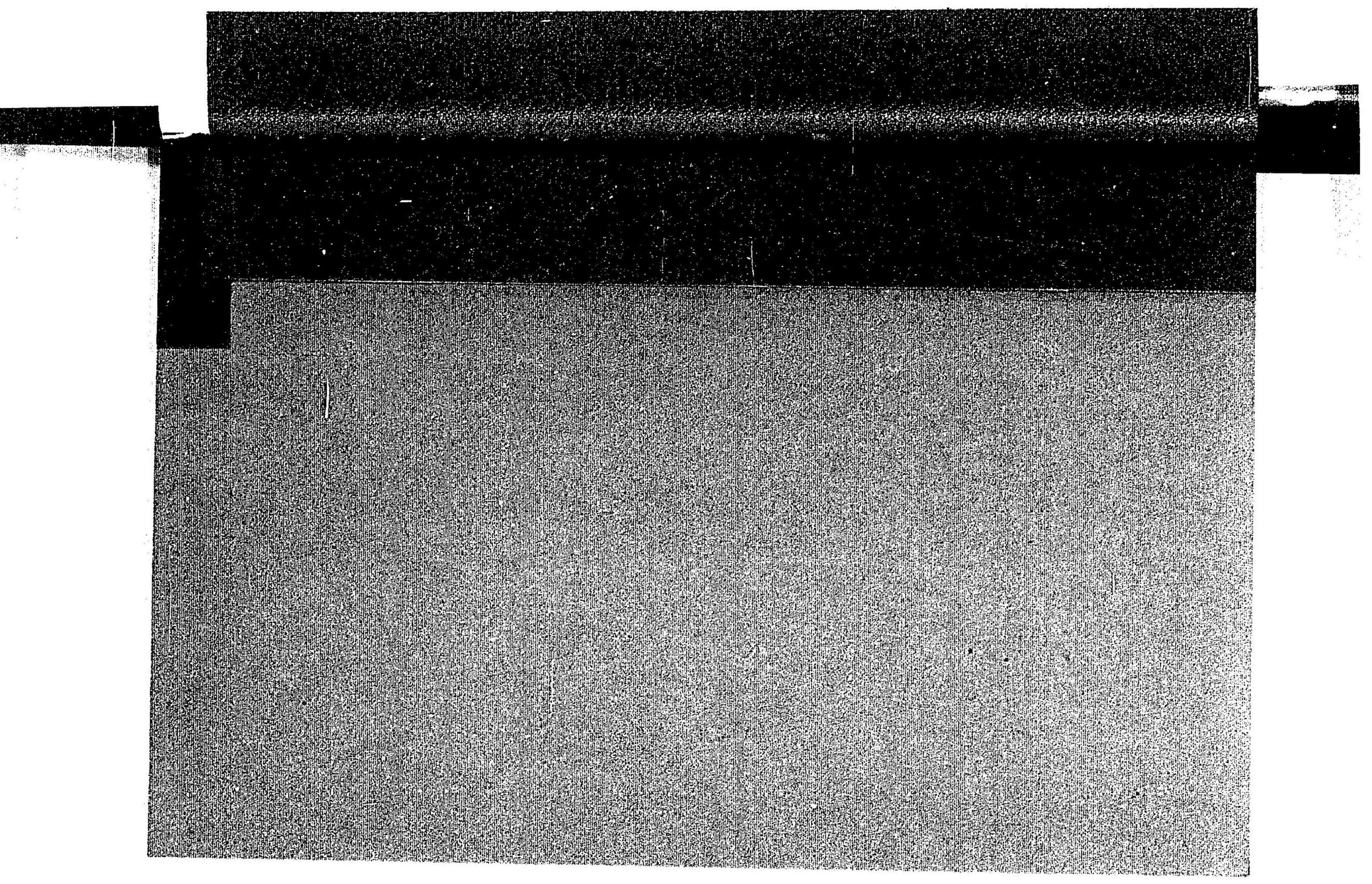
定價金六錢五厘

著者兼發行者 林甕臣
東京市牛込區若松町十三番地

印刷者 井上源之亟
東京牛込區神樂町一丁目二番地

印刷所 翔鸞社
東京牛込區神樂町一丁目二番地

發行所 言文一致會本部
君民同祖書院

不許複製

Rev